

小児慢性腎疾患の予防、管理に関する研究 ―まとめ―

酒井 糾

北里大学病院 腎センター

小児慢性腎疾患の予防、管理に関する研究班では、班を次の4つに分けて研究を進める事とした。

- (1)小児慢性腎疾患の予防と管理基準に関する研究
- (2)慢性腎炎、腎不全の疫学に関する研究
- (3)小児期腎疾患の早期発見に関する研究
- (4)腎疾患の遺伝に関する研究

まず、研究班(1)については、昭和49年以降実施されてきた小、中、高生を対象とした学校検尿スクリーニングの見直し、そして見い出された異常尿、病的尿所見の児童、生徒に対する保健指導、生活基準（運動処方）の見直し及び新たな試案として指導書の作成が主な研究内容である。

研究班(2)については、比較的罹病期間の短い小児症例での慢性腎不全の原疾患分類および腎不全に至るまでの病態変化について、アンケート調査を実施し、種々分析、検討を行い今後の小児腎不全発症を幾らかでも減らすことが可能かについて、研究を進める事を目標としている。

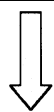
研究班(3)については、小児期腎疾患の早期発見のための事業として取り入れられてきている三歳児健康診査の尿検査について、検診様式、事後管理方法について検討を行い、幼児期発症の腎尿路疾患、特に尿路感染症とその基礎疾患となる腎尿路奇形の発症頻度の調査を行うかわら、診断の進め方についての研究を行う。

研究班(4)については、腎疾患の遺伝的背景について、まず発症そのものに遺伝的素因がある

か、次に病態の進行の上にも遺伝的素因があるかを家族歴調査、HLA分析で検討する。腎疾患の発症を未然に防ぐ上での基本的な研究になるので、社会的影響を考えて検討する。

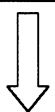
一般的に慢性疾患の予防、管理対策はどの医療レベルで、何歳の年令集団までを対象として実施するかが、その成果を問う上に大切な鍵となる。また、それ以外に支援体制、推進組織を含めた care system の拡がりがあるかないかも重要な鍵となる。こうした事実が care system を主とした腎疾患対策に的を絞った政策を現実のものとさせたのであろう。つまり、慢性に経過して末期腎不全となった場合にしても、透析や移植はあくまでも完全治癒(cure)を期待するというよりも、繰り返す治療と管理(care)を主とするものになるからである。慢性腎不全の発症に対して歯止めをかけるとするならば、予防対策・管理対策を強化する以外に方法はない。そして、より良い care system を地域ごとに確立してゆくことが何よりも大切でかつ必要である。

これからの3年間実りある研究が展開されるよう班員の諸先生方と共に努力したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児慢性腎疾患の予防,管理に関する研究一まとめ一

酒井 紉

北里大学病院腎センター

小児慢性腎疾患の予防,管理に関する研究班では,班を次の4つに分けて研究を進める事とした。

(1)小児慢性腎疾患の予防と管理基準に関する研究

(2)慢性腎炎,腎不全の疫学に関する研究

(3)小児期腎疾患の早期発見に関する研究

(4)腎疾患の遺伝に関する研究

まず,研究班(1)については,昭和49年以降実施されてきた小,中,高生を対象とした学校検尿スクリーニングの見直し,そして見い出された異常尿,病的尿所見の児童,生徒に対する保健指導,生活基準(運動処方)の見直し及び新たな試案そして指導書の作成が主な研究内容である。

研究班(2)については,比較的罹病期間の短い小児症例での慢性腎不全の原疾患分類および腎不全に至るまでの病態変化について,アンケート調査を実施し,種々分析,検討を行い今後の小児腎不全発症を幾らかでも減らすことが可能かについて,研究を進める事を目標としている。

研究班(3)については,小児期腎疾患の早期発見のための事業として取り入れられてきている三歳児健康診査の尿検査について,検診様式,事後管理方法について検討を行い,幼児期発症の腎尿路疾患,特に尿路感染症とその基礎疾患となる腎尿路奇形の発症頻度の調査を行うかたわら,診断の進め方についての研究を行う。

研究班④については,腎疾患の遺伝的背景について,まず発症そのものに遺伝的素因があるか,次に病態の進行の上にも遺伝的素因があるかを家族歴調査,HLA分析で検討する。腎疾患の発症を未然に防ぐ上での基本的な研究になるので,社会的影響を考慮して検討する。

一般的に慢性疾患の予防,管理対策はどの医療レベルで,何歳の年令集団までを対象として実施するかが,その成果を問う上に大切な鍵となる。また,それ以外に支援体制,推進組織を

含めた care system の拡がりがあるかないかも重要な鍵となる。こうした事実が care system を主とした腎疾患対策に的を絞った政策を現実のものとさせたのであろう。つまり、慢性に経過して末期腎不全となった場合にしても、透析や移植はあくまでも完全治癒 (cure) を期待するというよりも、繰り返す治療と管理 (care) を主とするものになるからである。慢性腎不全の発症に対して歯止めをかけるとするならば、予防対策・管理対策を強化する以外に方法はない。そして、より良い care system を地域ごとに確立してゆくことが何よりも大切でかつ必要である。

これからの 3 年間実りある研究が展開されるよう班員の諸先生方と共に努力したい。